

## 西海市の史跡を訪ねる

長崎史談会名誉会長 宮川 雅 一

平成25年3月9日、長崎伝習所「孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾」(村崎春樹塾長)の研修旅行で、西海市を訪れた。一行25名は、中型バスで最初に昨年開港450周年を迎えた同市横瀬浦に行く。

前来た頃に比べて公園が見違えるように整備されたが、それだけ往時の風情が失われた気がしないでもない。原田博二長崎史談会会長から横瀬浦に関する歴史と史跡の詳しい説明を受ける。長崎領主の長崎甚左衛門が受洗した場所であり、終焉の地でもあることなど興味は尽きない。

ここで出土した小五輪塔群を見学後、急な長い石段を降りて、県指定史跡「南蛮船来航の地」の記念碑前へ。今も波止場があって西海沿岸商船定期便が到着したところであった。入港ポルトガル船が目印とした白い十字架の立つハノ子島が見えた。上町下町跡碑近くの石段を上って、廃屋の並ぶ、道筋・幅が450年前そのままの道路を歩く。模型の石橋と記念碑のある思案橋跡は、長崎同様暗渠で川が見えない。甚左衛門居宅跡からバスに戻る。

船番所というバイキング方式食堂で昼食、新鮮なブリの刺身を思いっきり食べる。長崎ではあまり食べないラーメンや大村寿司(ここは大村藩領)も美味しかった。

1時間後、再び乗車し瀬戸へ急ぐ。生憎の大潮でフェリーが使えず、西海市営交通船に乗り込む。意外と島民らしい乗客が多い。炭鉱はとっくの昔閉山したが、稼働中の火力発電所があるので、原発事故の所為か結構賑わっているようだ。

15分で松島の釜浦棧橋に着き、島内バス松島線を待つ。周辺を歩くと島のシンボル・らくだ島、海浪の浸食を受けた後で隆起したらしい特色ある断崖、桜坂として有名な松島神社の石段、桂小五郎(木戸孝允)上陸跡を示す記念碑などが眼に入る。バスに我々25人が乗ったので満席、3人が立つ。途中島民3人が下車、我々だけとなり運転手がガイド役も勤める。

20分ばかりで、松島

炭坑四坑跡へ。大正3年(1914)松島炭坑株式会社が開坑し、その主力となるが、昭和4年(1929)に大出排水事故発生、多くの犠牲者が出て廃坑。ドイツ人技師設計の赤レンガ建物の外壁やコンクリート造りの変電所跡が残っていて、周辺を修景中であった。改修され真新しい犠牲者供養塔に祈りを捧げ、記念撮影をする。

次に松島捕鯨ゆかりの西泊へ移動するが、徒歩では結構遠い。足を引きずり歩いていると、見かねた近くの女性がわざわざ小型ワゴン車で来られ、送りますといわれる。私を含む約半数の者が3回の往復でその温情に浴する。また、農作業中のおじいさんがその手を休めて、鈴生りの夏みかんを沢山採って同行の人に渡されたというので、お裾分けを食べると大変甘くて美味しかった。島の人たちは何と優しい方々ばかりであろう。きっと炭坑はなくなったが、当時の家族的共同社会の人情が今も脈々として受け継がれているのであろう。

元禄8年(1695)平島から、深沢(松島)与五郎幸可が移住、捕鯨を始めたことされ、盛時のその利は莫大であった。衰退後の文政2年(1819)子孫は大村に移るが、菩提寺浄土宗正定院松島寺や与五郎の大きな墓石等が残る。住職不在で、有名な本堂の天井絵などの拝観はできなかったが、鯨船が往来し鯨の解体が行われた浜に下りて、往時を偲んだ。大村市東彼杵町に、古い鯨問屋が現存するナゾがこれで解けた。

それからまた歩いて棧橋に戻る。原田氏はじめ健脚組は、人気歌手福山雅治も登ったらしい桜坂に挑戦したという。こちらは、待合室で備付の本を読みながら交通船を待った。松島丸が到着し親しみの大いに増した島を後にする。



帰途、黄砂で朧になった夕日を見ながら、遠藤周作記念館近くの「道の駅夕陽ヶ丘そとめ」へ。閉店まぎわで半額になった弁当などを買込み、横瀬浦で見つけた大島トマトと共に土産にする。(終)